

2024 年度（令和 6 年度）学校評価自己評価表

向丘中学校区	校番 20	福山市立水呑小学校
最終更新日		2025年（令和7年）2月21日

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

Ⅰ 福山市	ミッション 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。 ビジョン 「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。
-------	--

Ⅱ 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容 ・高校生、社会人になったとき、正しい判断を基に、主体性、自己理解、課題発見、解決力が実行できるようにしてほしい。 ・正解のない問いや事柄を楽しいと思えるようになってほしい。 ・1on1は継続して取り組むことで、信頼関係の醸成に寄与すると思う。	児童生徒の現状 ・行事や各取り組みにおいて、生徒がやってみたいとアイデアを出し、実現する姿が見られる。 ・学習に粘り強く取り組み生徒が多くなっている。 ・様々な状況により、不登校になっている児童生徒がいる・	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”) めざす子ども像 (義務教育修了時の姿) 中学校区として統一した取組等	主体性、自己理解、課題発見・解決力 人とのかかわり合いを大切にし、学ぶ意欲を持ち、自分の生き方を主体的に考える子ども ○自校の取組を深く理解し、自主性・主体性を発揮し、「子ども主体の学び」の実現に向けて取り組む。 ○各校の実践や研究について交流を深め、職員の主体性の向上や意識改革のきっかけとする。 ○お互いの具体的な実践交流から課題意識、自己研鑽の意欲をもち、個人的に授業参観、放課後の相談等、教職員が起点となる研修を推進する。
--	--	---	---

Ⅲ 自 校

ミッション 自分で考え、判断し、決断して、行動できる子の育成 ～探求する授業づくり・自治できる学校づくり～	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)	主体性	課題発見・解決力	自己理解
学校教育目標 自ら学び 心豊かで たくましい 水呑っ子の育成	めざす子ども像	教材に興味を抱き、学び方を自分たちで選択・決定している児童。	自分の考えと友達の考えを比べながら協働的に課題解決をしている児童。	自分自身を見つめ直すことで、自分の考えを持ったり、自信をもって他者と関わったりすることのできる児童。
現 状 子どもの姿 ○「授業をたのしんでいる」児童の肯定的評価は93.7%であった。 ○行事などに全力で取り組み「できることが増えた」と感じる児童が多い。 ●児童は資料等を使って、根拠を示しながら、分かりやすく発表することができないと感じている。 ●高学年になると、学びについて、意識など（非認知的な力）に課題をもつ児童が多い。 授業 ○学力に困難さを抱える児童の学びを考えながら授業づくりができた。 ○単元を貫く問いを意識した単元づくりを協議し作成した。 ○見合いっこ授業を実施し授業の改善に努めた。 ●子ども個々の学びを見極めながら、任せたり伴走したりする授業づくりは途上段階である。 ●学年で教材について話し合う時間が少なく、深まりが授業に反映されなかった。	研究 教科等 全教科 主題・内容等	じっくり考え 共に考え 自分の言葉で表現する児童の育成 ～Joyful Learning を目指して～ 【主体性】「考えることはドキドキ・ワクワクの宝箱」 ～児童が、教材に興味を抱き、学び方を自分たちで選択・決定している。～ 【協働】「みんな大好き！語り合おう！創り上げよう！」 ～児童が、自分の考えと友達の考えを比べながら協働的に課題解決をしている。～ 【表現】「あふれる自分の思いを発信しよう！」 ～児童が、自分の考えを持ち、自信をもって多様な方法で友達に伝えている。～		

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標 ●は中学校区共通	中間評価(10月1日)				最終評価(2月末)				
							□指標に係る 取組状況	力を入 れ評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	力を入 れ評価	達成 評価	総合 評価	改善方策
1	子どもが主体 となる授業づ くり	★	新 規	1 自分で決め、学 びに向かって チャレンジし 続ける授業づ くり。	①資料などを根拠に自分の 考えなどを説明できる 対話的な場づくり。 ②子ども自ら自己調整しな がら学びを進めることの できる環境づくり。	●児童アンケート 「相手にうまく伝 わるように発表し ている」の肯定的評 価を85%以上に する。	○肯定的評価71.1% □児童がチャレンジ したり、うまく伝え たりする取組を学校全 体で行った。その結 果、児童一人一人の主 体や表現に対する自己 課題や認識力が高 まり、より客観的な評 価をする児童が増え たと考える。	3	2	・児童に対して、う まく伝える具体的に な仕方を指導したり、 評価したりする仕組 みをつくる。 ・児童が自分の発表 内容を振り返り自ら 改善できるようにす る。	○肯定的評価77% □中間評価を受けて、更に分 かりやすく発表するための手 立てや、伝えるための文章の 見直しをしたりする取組みを 行った。その結果、前回より、 6ポイント上がったが、 目標値には達成していない。 ◎短期経営目標について、 「自分で決めて進める学びは 楽しい」の肯定的評価は 85%と、当初の目標を達成 することができた。子どもの 「主体」「協働」「表現」を常 に意識した授業づくりを学校 全体として取り組めた結果だ と考える。	4	3	4	・児童が思わず伝えたいくなる 単元構成の工夫。 ・うまく伝えるための具体的 な技能の評価を発達段階に応 じて行う。(例えば、「聞く」で の質問力、「書く」での構成力、 「話す」での簡潔性など) ・表現することに対する抵抗感や 不安感をもつ児童への非認知的 な手立て。
2	1 安心して通 える学校づく り		継 続	1 より良い学校 生活を送るた めの目標を明 確にし、自己決 定の場を設け る。	①児童アンケートの内容を児童の 思いを書きやすい物にするため に詳しい事例をのせ、面談を通 じて個に応じた取り組みを充実 させる。 ②自己決定の場を作り、児童 会活動を充実させ、全体で の共有・相互評価のサイク ルを作る。	○児童アンケート 「学校で安心し て過ごすことが できている。」肯 定的評価85パ ーセント以上。	○肯定的評価91.4% □児童の困り感や課題を 教職員間で共有し、個に 応じた取り組みや保護者 との連携を行った。児童 朝会など、児童主体の活 動の場をより多く設け た。児童の活躍をみんな で評価し価値づけること で次の活動への意欲付け となった。	3	4	・児童の課題についてのア プローチだけでなく、行事 や児童会活動とつなげて、 児童が学校生活を前向き に楽しむことができる取 組を進める。 ・児童が自分事として課題 を捉え改善していけるよ う、児童発のPDCAサイ クルを進める。	○肯定的評価91.3% □児童会行事を前例踏襲では なく、児童発のアイデアから 企画運営したり、児童朝 会・代表委員会・委員会活動 を一つのサイクルとして定着 させたりすることで、目標値 を達成した。 ◎月に一回のいじめ防止委員 会、きらりルームの運営を通 じて、個に応じた取り組みや 組織として児童実態の共有を 進めた。	4	4	4	・児童会活動や縦割り班活動 を中心として児童相互のつな がりにより意識した取組を進 める。(兄弟学年での活動 委員会を適年での取組として 常時活動を充実させるなど) ・組織として生徒指導上の課 題に取り組むための場を設け る。(いじめ防止委員会・き らりルーム関係者会などを日 常的に行う)
1	命の大切さに ついて考える ことができる 児童の育成		新 規	【前期】 1 周囲をよく見て安全判 断 2 運動を通して、柔軟性・ 機敏性・調整力の育成 【後期】 3 食を通して健康な体づ くり	【前期】 ①放送を聴く指導の統一 ②調整力育成のための準 備運動を体育の授業で 行う 【後期】 ③食えることを通して命 の大切さを感じるこ とができるようにする。	○児童アンケート 「(安全、運動、 食を通して)命 の大切さについ て考えることが できた」肯定的評 価80%以上に する。(アンケ ートより)	○肯定評価91.8% □半年間、各学級での 日々の呼び掛けにより、 自分に厳しく回答する児童 が増えた。柔軟性を高め る運動は、週1回以上 実施を目標としていた が、実態は月1回以上実 施である。	3	3	・児童全体に放送を聞くよ う指導をし、定期的に肯定 的に評価をしていく。 ・柔軟性を高める運動を、週 1回全校一斉で行う。 ・後期の食育に関する取組 については、教職員が夏休 みに行った食育研修の内 容を動画にし、児童に見 せ、感謝の気持ち育てて いく。	○肯定評価95.1% □学校中で、放送が鳴った時 に動きや声を無視すること のできる児童が4月初より 増えた。 □柔軟性を高める運動を、全 校一斉に週1回取り行った結 果、5年生新体力テスト長座 体前屈結果(6月)よりも、1 月に測った結果の方が、男女 共に伸びていた。 給食を作る動画を児童に見 せたり、「給食ビンゴ」を行っ たりした結果、残量が減った。	4	3	4	・来年度4月初に教職員間 での意識統一を行い、児童に に対して同じ指導をしていく。 ・引き続き、児童が毎週ス トレッチをすることが出来るよ う、取り組みを行う。 ・給食委員会の活動などで、 今後も食に関する感謝の意識 を高めていけるように取り組 む。
1	教職員の働き 方改革を推進 する。		新 規	1 業務改善・業務 削減を推進し、 子どもと向き 合う時間を確 保する。	①会議、研修等の所要時間 ・終了時刻の設定を明確に する。 ②ICTを活用し、情報共有 を確実に実行。	○「授業づくりにあ る時間がある」 肯定評価85% 以上にする。	○肯定評価60% □会議・研修の時間設定を事 前に周知したり、議事録をデ ジタル化し、予め入力・閲覧が できるようにしたりすること で、効率化を図り、放課後の時 間に余裕を持たせることがで きた。	3	2	・空いた時間の使い方、優先 順位、教材研究・授業づく り等の考え方を共有・再 確認する。	◎肯定評価71.9% □目標値には達しなかつた が、前回評価より肯定回答が 増加した。 □会議の設定に加え、下校指 導の見直しを行い、放課後の 時間を確保した。校務分掌や 保護者対応が、授業づくりの 時間確保の困難さや教職員の 負担感につながっている。	4	3	3	・学級づくりについての研修 や分掌業務についての指導・ 支援に取り組む。 ・新しい統合型校務支援シ ステムが有効に活用できるよ う、研修を行う。

[プロセス評価の評価基準]

評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。

[達成評価の評価基準]

評点	評価基準
5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。
2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。
1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。

[総合評価の評価基準]

評点	評価基準	
5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。